

平成17年11月4日

国立駅舎の保存について

国立駅舎

国立駅舎は、大正15年に開業した都内に現存する木造駅舎としては、原宿駅に次ぐ古い駅舎です。正面に向けた切妻大屋根にハーフティンバー風とする洋風の系譜の意匠を持つ駅であり、このような個性的なデザインの系譜を持つ駅舎はほとんど現存していません。

また、国立駅周辺は、駅と駅前広場そして大学通りが一体的かつ魅力的につくられ、まちの段階的構成の頂点に位置づけられています。中でも駅と駅前広場を一体的に整備した例は珍しく、それ以後の駅前広場の先駆的事例となりました。

国立駅舎は、こうした国立の景観構造の頂点に立ち、赤い三角屋根の個性的なデザインは、くにたちのまちの顔として、同時期につくられた駅前広場や大学通りとともに市民や駅利用者に愛され、国立らしさを象徴する存在となっています。



連続立体交差事業の進捗

現在、中央線の三鷹駅～立川駅間では連続立体交差事業が行われています。この事業は、道路と鉄道を連続して立体化することにより、踏切での交通渋滞や事故の解消、鉄道により分断されている地域の一体化などを実現する事業であり、国立市のまちづくりに大きく寄与する事業です。

先日9月24日深夜から25日早朝にかけて、西国分寺駅から立川駅間の上り線が仮線に切り換えました。現在は下り線の仮線路盤建設工事が進められています。上り線の切換から概ね1年後に下り線が仮線へ切換る予定です。仮線への切換が終わり次第高架の建設工事が始まります。

駅舎の保存

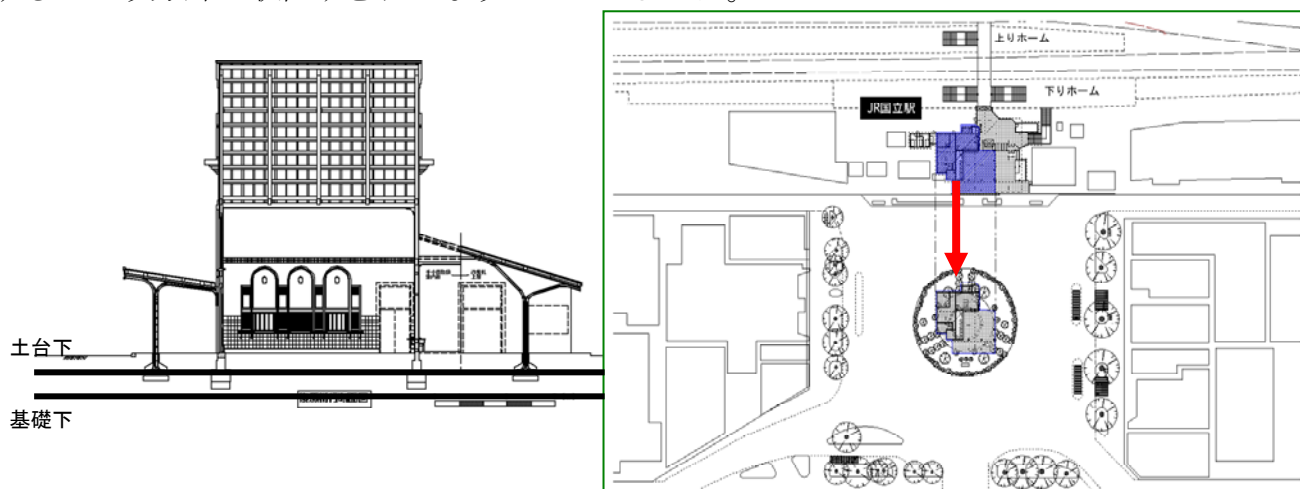
連続立体交差事業により、国立駅は高架の新しい駅となりますが、高架工事の際には、現駅舎が工事の支障になります。

国立市は、当初撤去計画だった国立駅舎を現地において、現存のまま保存することを前提にこれまで調査、検討を進めており、平成14年には保存活用の陳情が議会で採択されました。さらに平成16年3月には、多くの市民にかかわっていただいた国立駅周辺まちづくり検討会から提案書が提出されています。

駅舎を将来もこれまでどおり、おおむね現在の場所において保存していくため、いくつかの方法を検討しました。

ひきや 曳家による保存

その結果、国立駅舎を工事期間中、曳家により一時駅前円形公園へ移設し、高架工事終了後に関係機関と協議の上、おおむね現位置に再移設し国立市指定文化財として保存活用するという方針で取組みをおこなうこととしました。



※曳家工法

駅舎の土台下端もしくは基礎下端まで地盤を掘削し、土台下もしくは基礎下に新たに鋼材を設置して、ちょうど鋼材の新たな土台で駅舎全体を受けるような形とします。その後、鋼材下にジャッキセットを取り付けジャッキアップし、鋼材下の移動方向にレールをかませ、油圧ジャッキにおいて、ゆっくりと移動方向へ押し移動先へと運びます。この工法は建物を解体せずそのまま移転させることができ、関西線奈良駅舎や首相官邸など多くの建物移転に用いられています。

現在の取組状況

円形公園への曳き家については、東京都、JR東日本と協議し、国立市が曳き家を行い、その費用約6000万円は、連立事業費の負担割合で三者が負担することとなりました。

高架工事は来年（平成18年）の夏から秋ごろにかけて開始される予定です。高架工事に支障のないように、そして将来の保存活用に向けて駅舎を曳き家するためには、17年度中に曳家の設計、18年度に工事に着手しなくてはなりません。現在そのための関係機関との協議に努めています。

駅舎保存について皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

(ご意見、お問合せ先) 国立市建設部まちづくり推進課

[TEL] 042-576-2111 [内線] 382 [FAX] 042-576-0264

[E-mail] sec_machizukuri@city.kunitachi.tokyo.jp